

72. 現存する民族衣裳に関する研究 (第2報)

ギリシヤ

中村栄養短大被服 加地 悦子

1. 服装に関しては、世界いづれも一様に、洋服が使用されている現状であるが、いまだに各国固有の民族衣裳は、その日常に残されている。民族衣裳は、その土地の風土、住民が工夫して生み出した衣裳であり、伝統の上に育った民族衣裳を研究することは、衣服を研究するものにとってかくことのできない一要因である。昨年度のオランダについての報告にひきつづき、ギリシヤについて報告する。

2. 昭和32年10月現地ギリシヤにて資料を得た。

3. ギリシヤの民族衣裳の古代の固有さは、ローマ時代以来、中世、近世における他民族の侵入によって、現代では、地域的にブルガリア系、トルコ系、あるいはアルバニア系の影響がみられる。殊に、エーゲ海に散在する諸島には、これらの影響による民族衣裳の違いが、はっきり表われている面白い現象がみられた。

また宗教による影響にも興味深い点がみられた。